

〈prologue〉

ホラー 「horror」よる言葉で

奥山 恵 (「日本児童文学」編集部)

子どもたちに、いや子どもだけでなく大人たちにも、「こわい話」はいつの世も人気がある。夏になると語られる怪談話、行列となるお化け屋敷、話題のホラー映画、怪奇漫画や恐怖ゲーム……。そして、子ども向けのこわい本も、次々と出版されている。しかし、ひとくちに「こわい話」と言っても、人びとが、また子どもたちが、何を「こわい」と感じるかは、時代により、社会により、少しずつ変わってきているのではないだろうか。

英語で示される「horror」は、「抽象的でゾッとするような恐怖」を表す言葉である。一般的な恐怖を表す「fear」でもなく、また、「現実的な危険に身がすくむような恐怖」を表す「terror」(テロリズムにつながる言葉)でもない、「horror」。この言葉を、たとえば角川春樹は、横溝正史作品の復活を仕掛けるために意識的に使ったと、次のように証言している。「60年代に社会派ミステリーが台頭し、その旗手であった松本清張は横溝作品を「特異な環境に特別

な性格の人物が登場し、物理的なトリックを用いて背筋がぞっとするような恐怖を与える『お化け屋敷』と酷評しました。でも、ウチは『お化け屋敷』で行こう、と。怪奇小説などと呼ばれていたこのジャンルに、当時、日本にはなかった「ホラー」と命名して宣伝を仕掛けました」(『週刊SPA!』1011・11・15)。同じ頃、「ローズマリーの赤ちゃん」や「エクソシスト」などのホラー映画がヒットしていたことから、横溝の小説も「ホラー」という言葉で売れる予兆を読み取っていたとも言える。はたして、映画「犬神家の一族」(一九七六)は大ヒットとなり、横溝小説ブームが生まれていく。ここには、七〇年代の終わり、社会派ミステリーの「こわさ」とは異質の「こわさ」が求められる。それは「怪奇小説」という従来の言葉では伝えられないものであったという事実が見える。その後、一九九四年からは「角川・日本ホラー小説大賞」が創設され、坂東眞砂子(『蟲』)、瀬名秀明(『パラサイト・イヴ』)、貴志祐介(『黒い家』)、